

# 國學院大學學術情報リポジトリ

自由な学風と飾らないお人柄：  
林先生の訃報に接して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 長門, Sato, Nagato メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000432">https://doi.org/10.57529/0002000432</a>

新築間もない世田谷のご自宅で、故郷訪問の大歓迎の様子が細かく撮影されたビデオを拝見した。その後、先生はご夫妻で日本華僑人学会にも参加されるようになったといわれる。

二〇一七年二月一八日朝、私はご子息文雄さんから先生が前日急逝されたとの報を受けた。すぐに酒寄氏、佐藤長門氏に連絡してご自宅を訪れて亡骸と対面し、ご遺族におくやみを述べた。林先生は二〇一五年、先の『長崎唐通事』をもとに身内のために平易に書き直した『長崎唐通事 林家の歴史』を私家版で刊行されたことがある。書齋に入ると、窓側の机に岩橋先生のお写真のあるのが目に入ったが、真ん中に置かれたパソコンとプリンターのある机の上には、その私家版があり、傍らに近世の長崎に関する書物が開かれたままになっていた。逝去される四日前の状態であった。先生は最期まで林家の歴史の補訂に取りかかっておられたことを知った。実に研究一筋の生涯であったと感じ入ったのである。

奥様などのお話では、先生は近年、ご子息、ご令嬢の車で幼稚園以来馴染の中野教会に通う頻度が高くなり、また気に入られた賛美歌も多くなったところであったという。島田勝彦牧師は、先生が教会の設備などの改善についても積極的にご意見を述べておられたことを話された。ご葬儀では林先生ご愛唱のいくつかの賛美歌がご遺族や参集した大勢の方々によって何度も歌われた。心よりご冥福をお祈りする。

## 自由な学風と飾らないお人柄 ―林先生の訃報に接して―

佐藤 長門

林陸朗先生の訃報に接したのは、亡くなられた二月十七日の翌日にかかってきた鈴木靖民先生からの電話によってであった。電話では、鈴木先生と分担して林先生のご逝去を知り合いや教え子たちに知らせること、前夜式・告別式に先立って、弔問のため十九日の午前中にお宅を訪ねることなどを決めて、受話器を置いた。林先生と最後にお目にかかったのは、足を手術された先生が下北沢の病院にリハビリ入院されていた二年前、鈴木先生とお見舞いにかがったときであったが、入院されているとはいえ、以前と変わらない元気なご様子に安心した覚えがあり、また昨年五月に拙著『蘇我大臣家』をお贈りした際にも、一般向けにしては少々難しすぎるのではないかとのきびしい感想が書かれたお葉書をいただいていたので、電話を切ったあとも先生の死がなかなか信じられず、しばらく書斎の椅子に寄りかかったまま、次の行動に移ることができなかつた。

ご自宅への弔問には、鈴木先生と酒寄雅志先生、それに私

の三人で向かった。先生のお宅には大学院へ進学して以来、お年賀に数回おじやました記憶があるが、何しろ三十年ほど前のことであるので、正確な順路などはすっかり忘れてしまっていた。幸い酒寄先生が覚えておられたので、その指示で路地を歩いていると、われわれが道に迷っているのではないかと心配されたご子息が、ご自宅に続く交差路までわざわざ出迎えてくださった。ご自宅一階のお部屋に横たわっておられた林先生は、私の記憶のなかにあるふくよかなお顔立ちとほとんど変わりなく、ただ眠りにしているだけで、今にも起き上がってこられるのではないかと思うほどであった。枕元に猷花したのち、ご家族の方々と先生の思い出話や前夜式の打ち合わせなどをおこない、先生のご著書をさがすために、隣室の書齋にも入れていただいた。そこには通常の書棚のほか、可動式の本棚も何基か備えつけられており、また机の上には亡くなる直前まで調べられていたという、林家の歴史にかかわる長崎の書物などが置かれていたが、不肖の弟子としては、お贈りした何冊かの著・編書が机に立てかけられていたことが、何よりうれしい。発見であった。これは先生が亡くなるまでずっと、教え子のことを気遣ってくださった証であり、これからもしつかり努力をなささいという言葉のご指導のように感じられた。

私ははじめて林先生と親しく話をさせていただいたのは、

卒業論文の第一次題目を決めるため、校舎とは道を隔てた常磐松二号館（現AMCの多目的ホール付近に所在）の四階にあった先生の研究室を訪ねたときだったように思われる。当時の日本史演習の取り方は現在とは異なり、古代・中世・近世・近代のすべての時代をクラスごとに全員履修するというカリキュラムで、私も二年次の近世史は大谷貞夫先生（くずし字の解読）、三年次の古代史は林先生（『続日本紀』）、同じく中世史は小川信先生（『満濟准后日記』）、四年次の近代史は上山和雄先生（明治時代の新聞）の授業を取った記憶があるので、三年の授業時に先生のご指導を受けたはずなのだが、残念ながらそのあたりの記憶はすっかり抜け落ちている。先生の代表的な業績のひとつである『完訳注釈続日本紀』の奥付を見ると、私が三年生だった一九八六年に第一―第三分冊が刊行されているので、テキストである『国史大系』本のみでは書き下しすらおぼつかなかった当時の私は、おそらくすぐる思いで先生の訓訳に手を伸ばし、レジユメを作成したに違いない。

手元に残る卒業論文の指導カードによれば、第一次題目の相談にうかがったのは十月二十七日のことであったが、その日、先生を目の前にしていったい何を話したのか、細かなことはまったく覚えていない。指導カードには、第一次題目として「古代における改賜姓と氏族系譜に関する若干の考察」

という大仰なタイトルが記載されているので、おおかた古代氏族について聞きかじった程度の知識をひけらかしたのかも知れないが、賜姓源氏研究の第一人者に向かつて、改賜姓と氏族系譜を卒論のテーマにしたいなどと口走るとは、まさに恐れを知らぬ青二才の所行といふべきだろう。右の題目が残っているということは、氏族研究、それも少々マニアックなテーマを扱いたいという私の話を先生がとりあえず聞いてくださったからにはかならないが、そのときの記憶としてはただただ先生の「威厳」に気後れし、大粒の汗が額から流れたことしか覚えていない。自分の年齢は現在、私が卒論題目を提出したときの林先生の年齢に近づきつつあるが、先生の泰然自若とした態度、雰囲気にはなお到底およばない。

四年生に進級した年、鈴木先生が国外派遣研究で一年間中国東北部に留学されることもあって、古代史専攻の学生はすべて自動的に第二次題目を林先生に提出することになった。指導カードによると、題目の相談には六月二十四日にかがっており、題目は「阿倍氏の正宗とその別氏」に変更した。当時の卒業論文は主査・副査制をとっており、私には副査として酒寄先生がついてくださることとなった。恒例の卒論夏合宿は箱根芦之湯の松坂屋でおこなわれたが、折しも学習院大学中世史の安田元久ゼミが一日遅れで同宿し、現皇太子の徳仁親王もお忍びで来ているらしいとの話がゼミ内に広まった

ことも、懐かしい思い出である。私が卒業論文を提出した一九八七年ごろは、ようやく世間に個人用のワープロが普及し出した時期であったが、まだまだ学生風情が気軽に持てる代物ではなく、当然私の卒業論文も手書きであった。林先生の評価は、卒論の最後のページに鉛筆で書かれてあり、「むずかしい問題をよくこなして立論したのは評価でき、おおむね説得力があるものの、なお問題点が多い」云々というものであった。

一九八八年、大学院博士課程前期に進学した私は、引き続き林先生に指導教授をお願いした。当時の大学院古代史の授業には、林先生の『続日本紀』演習、鈴木先生の首長制に関する講義、今江廣道先生の『兵範記』演習、山中裕先生の『西宮記』演習などがあり、それまで平安期の史料を手にしたこととなかった私にとって、とてもハードルが高い授業ばかりであった。前期課程一年時の思い出としては、その年の八月に長屋王邸宅跡から「長屋親王宮鮑大磐十編」と書かれた木簡が出土したことにより、数カ月のあいだ奈良文化財研究所で木簡洗いの手伝いをしないかとの誘いが、急遽一年生に対してあったことである。その年の大学院（古代史）には四名の新入生が入学したが、そのなかから私と小林弘宜君、川島浩嗣君の三人が名乗りをあげ、研究所に近い地域に住んでいた発掘補助員のMさんのお宅に下宿するというかたちで、年

末まで木簡洗いに従事することとなった。木簡洗いとはいっても、完形に近い木簡を扱わせてもらう機会はなく、そのほとんどは削り屑で、墨痕が認められるもの自体少なかったが、当時の私は「帳内」(親王・内親王に与えられた舍人)と「資人」(上級貴族に与えられた舍人)の区別も知らない無知そのものだったので、研究員の綾村宏さん(現、京都女子大学教授)や寺崎保広さん(現、奈良大学教授)、加藤優さん(元、徳島文理大学教授)らの話を傍らで聞くだけでも、得がたい貴重な経験だったように思う。

しかし現在と違って、大学院生が大勢在籍していたとはいえず、新人生四人のうち三人を長期間離脱させるとは、林・鈴木両先生は実に大胆な決断をされたものである。國學院大學の古代史は、学生・大学院生の自主性を重んじるとともに、それが彼らにとつてよいことと判断された場合には、通常では考えられないような柔軟な対応を取ることがある。奈文研への院生派遣もそのひとつで、これはその後も夏休み期間を利用して数年間続くこととなった。自主性という点に関していえば、私はいままで林先生や鈴木先生から、自分の研究テーマについてあれこれ指図をされた経験がない。もちろん、毎週月曜日の午後六時ごろからおこなっていた論文指導演習(サブゼミ)では、発表するたびにすべし指摘や適切なアドバイスをいただいていたが、研究テーマや方向性に対して

ダメ出しされたことが一度もないのである。これは別に私に限ってのことではなく、さまざまな思考の持ち主がいた古代史の大学院生のなかで、研究の方向性を直された仲間はいくらもいなかったように記憶している。「学問の自由」といえば大げさだが、私を知る限り、古代史ゼミにおいては研究テーマの選択は大学院生の自主性にゆだねられていたのである。

まだ研究のイロハもわからない学部生ならともかく、卒業論文を書いた経験のある大学院生が自分の研究テーマをみずからの責任で決めることなど当たり前だと思っていた私は、分野が異なる或る研究者に「國學院大學に入学して以来、研究テーマや方向性に制限がかけられたことはない」と話したことがある。するとその人物は、あたかもそれが稀有なことだというニュアンスで、「佐藤さん、それはとても幸せなことだよ」と返してきた。私はあつけにとられてしばらく二の句が継げなかったが、現在は林先生や鈴木先生が作りあげてきた「自由な学問の場」は貴重であり、両先生の薫陶を受けたわれわれはかかる「伝統」を今後も堅持していくべきだと考えている。この文章を書いている今はまさに、学部三年生が第一次題目の相談に各研究室を訪ねている時期である。文献史料がなく、明らかに考察自体が困難であるテーマは当然無理であるが、それ以外であれば今後もできるだけ学生諸君の希望が通る方向でアドバイスをしてあげたい。それこそが、

林先生の素志にもかなうことだと思おうからである。

私の修士論文の題目は「ヤマト政権の権力構造―伴造氏族を中心として―」というもので、ない知恵を絞りながらも何とか書き上げ、主査林先生・副査鈴木先生に提出した。修士論文のうち、卒業論文であつかった阿倍氏の問題を再検討した部分は『日本歴史』に掲載され、また修論ではじめて検討した群臣合議の問題は『歴史学研究』や先生の古稀記念論集『日本古代の国家と祭儀』などに収載されたが、修論の一部を先生の記念論集に書かせていただいたことは、先生から受けた学恩に多少なりとも報いることができたかもしれないという点で、個人的にとてもうれしいことであつた。修士論文の提出後、私は引き続き博士課程後期に進もうと考え、その相談に先生の研究室を訪ねたところ、「指導教授を鈴木さんに変えたらどうか」という思いもよらぬご提案を受けることになつた。奈良から平安時代にかけてが専門の林先生にあって、学部時代から一貫して令制以前をフィールドにしてきた私は、あるいは「面倒な教え子だったのかもしれない。先生の真意がどの辺にあつたのか、今となつては確かめることができないもの、教え子の身の丈に合つた指導を考慮された結果が右の提案だつたことは疑いないだろう。弟子を抱え込んで離さない指導者が多いなか、教え子のことを第一に考えて自分以外の指導を受けるようにながすことは、なかなか

かできることではない。これも、林先生の自由な学風と飾らないお人柄がなせる技だと思われるが、ともかく私はこれで他大学に出ることもなしに、林先生と鈴木先生というふたりの指導教授を持つ身となつたのである。

今回、林陸朗先生の追悼文をまとめてみて、先生からいただいた学恩がいかに大きいものであつたか、改めて確認することができたように思う。先生のご指導の下、自由に歴史研究をおこない、得がたい経験もさせていただいた。私は人よりだいぶ遅れて大学に入学したのであるが、先生はそれで私を差別されたことは一度もない。博士課程後期を満期退学する際の口頭試問で、ほかの先生がその点を突いてこられたとき、林先生は「でも、学部に入學してからはストレートだよ」といつて、私をかばつてくださった。他人からみればどうでもよいことかもしれないが、私にとっては先生の細やかな配りが非常にうれしかった。國學院大學に入學し、先生に指導を受けていなければ、研究者としての今の私は存在しなかつただろう。林陸朗先生のご冥福を、心よりお祈りいたします。